第３回新たなおおさか農政検討部会　議事概要

日　　時　　令和３年１１月１７日（水）１３：３０～１５：３０

場　　所　　咲州庁舎４１階　共用会議室７

出席委員　　増田部会長、藤田委員、中筋委員、髙井委員、西辻委員、山口沙弥佳委員、山口力委員

内容

１　事務局説明

* 第１・２回部会での主なご意見
* 次期おおさか農政アクションプラン（仮称）骨子

２　委員の主なご意見

* **骨子（これまでの取組みとこれからの方向性）について**

〇新規就農者の販売額を比較する際は、品目により反収が異なるため、品目別で比較することも必要。

〇地産地消について、JAと府の施策の連携が重要ではないか。

〇担い手はどの層を具体的に指しているのか。骨子では新規就農者＝担い手に見える。地域全体で農業に携わる人や企業等をすべて担い手と考えていく必要があるのでは。

* **骨子（めざす将来像と実現に向けた視点）について**

〇都市農業の大きな意義として、消費者が近くにいることや自然環境に対する希求度が非常に高いことから、農の多面的機能に求められるものが多いといったことが考えられ、都市だからこそ有利、あるいは求められる「農」という表現にしてはどうか。

* **骨子（取組みの方向性と施策）について**

〇大阪の農産物のブランド価値が指標の一つになると考えられる。従って、「力強い大阪農業の実現」に向けた５年後の達成目標（KGI）は農業産出額ではなく、ブランド価値を表すといった意味で、農産物の物価を指標としてはどうか。

〇農家の規模によって目標等を分けて考えていくことも、今後の取組みの方向性を検討する上では必要では。

〇大阪での既存農家でのスマート農業技術の導入については、細分化された、あるいはモザイク状に立地するほ場が多いことから、一部をスマート化しても十分に活用しきれない場合があるので、作物ごとの指標を作るべきでは。そうすることで、導入したが活用がうまくできず損する、といったこともなくなるかと思う。

〇府民との関係性の中で大阪府の農業がどう展開していくのかを考えると、新たなライフスタイルとは、従来の市民農園でなく、食糧生産の一翼を担うような市民農園が新たなライフスタイルにあたるのでは。

〇大阪府は企業も多く、６次産業化につなげていけるところが強みだと考える。企業との連携についてももっと盛り込んでいくべきでは。

〇スマート技術の導入には、農業機器だけなく、労務管理に取り入れるといった方法もある。そうした視点で見ていくのもいいのでは。

〇家族経営や法人経営での農業展開以外にも、地域農業の視点として地域の農家と商工事業者と連携した取組みもあると思う。そういった取り組みについても組み込んでみては。

〇有機農業に転換することが、脱炭素社会にどう貢献するのかについて、消費者や生産者にどう認識されるかということを考える必要がある。

〇農家をやめていく人や既存の農業者の経営基盤をどう強くしていくか、現在農業に従事されている方の労務管理など基礎的な部分の活性化という色を見えるようにするべき。

〇消費者が多い大阪府では、それぞれが農業にかかわる機会をもっと増やすためには、まず農家へのサポートが大切では。どのように既存農家に意識転換を働きかけ、経営力を向上させ、都市農業の有利さを活かすアプローチをどのようにするのかを踏み込んだ形で書いていくべき。保全と創造のそれぞれの観点から入れてみてはどうか。

〇フードマイレージについて、府の市場改革を盛り込み、物流拠点にするなどの取組みを提案したい。

〇大阪産の魅力向上についてが、他府県でもできることが書いてある。大阪府のアイデンティティやブランディングについても盛り込んでみては。

* **骨子（リーディングプロジェクト）について**

〇新しいサプライチェーンに取り組まなくても、既存の取組みを各団体とうまく連携すれば活用できるのでは。

〇府民連携プロジェクトのところで、脱酸素社会の実現で求められる農業分野での貢献がどういったところなのか、もっと府民に知っていただく必要がある。

〇新規就農者の育成に携わっていると、既存農家が憧れてもらえるような経営に見られていないと感じる。主要品目の新たな産地強化プロジェクトにはとても期待しており、後継者や新規就農者から見て魅力的に思ってもらえるように取り組んでもらえればと思う。

〇リーディングプロジェクトに唐突感がある。例えば、個別の重点的な取組みの３つをセットとして展開するとリーディングプロジェクトになる、といった示し方で位置づけを明確にするべき。

* **骨子（アクションプラン推進に向けた各主体の役割）について**

〇企業の役割については、食品関連企業と一般の企業、農業の生産を担う企業などで分けておく必要であるのでは。

〇脱炭素では、ミシュランの格付けの新しい指標であるグリーンスター（環境にやさしい取組み）に目を向け始めている。このグリーンスターなどに取り組む飲食店への支援も盛り込んでみては。

〇６次化が何かを考えるときには、まず、１次産業の大切さがあると考える。ワインの場合、古いものや原種に近いものはその地域（地元）にしかないため、重要視されている。６次産業が加工して新製品を作るだけではない、という認識を持ってもらう。みんなで自分の地域の経済を回していくようなイメージの6次産業化ができれば、大阪の農業が活性化するのでは。

〇府内の小・中学校の学校給食に府内農産物を使う機運を高めていくため、例えば知事が先頭に立って取り組みを促進するなどはできないか。

〇各主体の中身を選択的に書き分けることはもちろんだが、今回のプロジェクトでは農業と農空間についてただ一本で繋いで書いているだけ。それぞれの関係性も落とし込むことで初めて、教育的な機能を果たす・農産物を提供するといった各主体の役割が見えてくると思うので、もう少し具体的に書く必要があるのでは。

〇府民、NPO、学校は消費者、農業は生産者と規定されている。府民、NPO、学校についても農空間の保全や農地の担い手になりうる。生産者も人材育成の指導者にもなりうる。新しい見方で担い手を見て、主体のところを見直して欲しい。

* **骨子全般について**

〇アクションプランについては、単純に農業だけを強くしていくための計画ではな　いので、農業での仲間をどう作るとか、府の農業を底上げし府民が関心を持つことで、結果として力強い農業の実現やサスティナブルな社会が達成されるといったように、シナリオ、あるいは戦略として全部がつながってくるものと思う。

〇食と農については、食の部分が見えてこない。食と農がつながっていくということの見える化についても検討していただきたい。